

平成29年10月12日(木)

老球の細道363号

コミュニケーションはバスケットボールで 会津バスケットボール協会 室井 富仁

4年前、サッカーU-17の世界選手権で日本代表がベスト16まで進出したが、惜しくもスウェーデンに破れ2大会連続ベスト8進出はならなかった。この代表チームは、コミュニケーションスキルを磨くために、映画を鑑賞して、その感想をみんなでディスカッションをしていたという。当時話題になりインターネットに流されていた。

今や日本のスポーツ界のみならず、あらゆる業界でコミュニケーションスキルの向上が叫ばれている。特に日本人は内向き志向が強く、これからのグローバル時代、世界の間人とコミュニケーションできる人材を育てないと日本の将来はないと言われている。

バスケットボールにおいても、外国人コーチが日本の中、高校生に講習会を実施すると声が出ない、話ができないことにびっくりする。同じ学校、同じ地域の子ども達ともコミュニケーションができない。そのくせ準備運動のランニング時にわけのわからない狼の遠吠えのような声をみんなで出している。その奇怪な現象に外人コーチは失笑するという。

先日も中学校の大会を観戦してきた。毎回の光景だがコート内の選手たちにほとんどコミュニケーションがない。無言のまま、無表情、無感動の状態でゲームが進行する。一生懸命声を張り上げているのはベンチのコーチと応援席の保護者達。1点を争う大接戦のゲームでも、選手同士が声を出してコミュニケーションをとる、励まし合う、落ち着かせるなどのチームワークはほとんどない。ゲームが終わるとおしゃべり三昧なのだが。

スポーツの場で必要とされるコミュニケーションの内容は三つあると思う。

一つは「モチベーションアップ」。盛り上げること。シュートが入ったら声を出してみんなで喜ぶ。ナイスプレーに対してみんなで賞賛の声を上げる。負けている時、競り合っている時、チームの流れの悪い時皆で励まし合う。

二つ目は「コーチング」。プレーヤーに注意を促す。やって欲しいプレーを指示する。遠慮なしに自由に話ができる、指示できる雰囲気や日常から養っておかなければならない。いざという時、スポーツには年上も年下もない。上級生を呼び捨てにする時もある。

三つ目は「シチュエーション」。目的、作戦、戦術などについて共通理解をもつために、いつでも、どこでも話し合うこと。特にバスケットボールにおいては、コーチから与えられる戦術、作戦を聞くだけでなく、プレーヤー同士で確認する意味でも話をする。時には、コーチに対して自分の考えを言うくらいの主体性も必要である。

チームスポーツは、全員がスーパースターである必要はない。現実的に不可能である。それぞれ得意技を持った個性派集団が分業体制で化学反応を起こし、個人の総和以上の力を発揮するところに醍醐味がある。また、ディフェンスにおいては、チームで守るために個々の力が壁になり、城となるための接着剂的役割を果たす。

コミュニケーションスキルは現代人に求められるライフスキルビック3(問題解決力、やる気と自発性)のうちの一つである。バスケットボールはこれを学ばせるのに最適のツールである。おしゃべりは得意だが、肝心の時にグーの音も出ないプレーヤーが多い。大事な時に、いざと言う時に適切なコミュニケーションのとれる選手、人間をふだんから育てていかなければならない。コミュニケーションを指導できるコーチは一流である。